

意識は日常性と言う名の平面から立ち上がり、劇的瞬間を味わう。

大太刀 名称	打 太 刀			仕 太 刀
	構え	踏込み足	打突部	構え（他 省略）
一つ勝	陰刀	左足	面	正眼
鐔割り	〃	右足	〃	〃
二つ勝	〃	左足	〃	〃
陰刀	〃	〃	〃	〃
左右之払	〃	右足	左拳	〃
陰之払	〃	〃	左肩	〃
早切返	〃	〃	面	〃
順皮	〃	左足	切先触	〃
抜順皮	〃	右足	〃	〃
			押	

但し、あくまで当方法論は補助としてであり、理想は「一刀流型」50本が、順序どおりに演じられて、しかも前述の如き充実感が把握できるのが望ましいことに言うを俟たない。

福田恒存氏はかくも述べられている。「役者修業、即人間修業」（『せりふと動き』）・「私のいふ演戯とは、絶対的なものに迫って、自我の枠を見いだすことだ。自我に行きつくための運動の振幅が演戯を形成する。なんとかして絶対的なものを見いださうとすること、それが演戯なのだ。」（『人間・この劇的なもの』）と。「演武」もまたかく有りたきもの。

とまあ、すっかり小理屈で貴重なお時間を費やさせてしまいました。理屈はこうだが、さて実際はと言うことなのでありますが、まずは「お代は見てのお帰りに」と言うことにしまして……えー、おあとがよろしいようで……。

追記、9本の当方法論は、本数も少ないので、禅修行者の「前後際断」の動中の工夫にもなり得るのでは。

尚、『人間・この劇的なもの』は名著、名文と私は思いますので、ぜひご一読を。

最後にもう一言。

人は心の奥底ではいつも、前述の如き、充実又は充足の瞬間、実在感を味わえる瞬間を期待して生きている。しかしそうした機会はなかなか得られず、日常性に埋没している（即ち意識が平面に引き倒されている）状況に苛立ちを抱きながら生活をしている。

人は、何かの手段によらずしては、そうした瞬間を味わい得ない。そして人間の叡智は儀式・型を作ったのだ。（同評論参照）

恒存氏は『人間・この劇的なもの』の最終章で、こう述べられている。

「祭日とその儀式は、人間が自然の生理と合致して生きる瞬間を、すなはち日常生活では得られぬ生の充実の瞬間を、演出しようとする欲望から生まれたものであり、それを可能にするための型なのである。私たちが型に頼らなければ生の充実をはかりえぬのは、すでに私たち以前に、自然が型によって動いてゐたからにほかならぬ。生命が周期をもつた型であるといふ概念を、私たちは、ほかならぬ自然から学び知つたのだ。」